

# JISSEN

---

## No.09



**TAKE FREE**

## CONTENTS

- 03-09 新たなる仏教者の実践のあり方を巡って -前-
- 10-11 SORYO FOR EVERYTHING  
藤尾 見吾  
柳原 遊
- 12-13 実践真宗学研究科 10周年シンポジウム  
いまを生きる宗教～宗教者×現代社会
- 14 INFORMATION
- 15 法話  
「生かされて生きる」岡 至

---

編集長  
編集者

写真  
デザイナー  
アートディレクター  
スペシャルサンクス

宗本 尚瑛  
木村 友讓  
加藤 文彌  
天崎 仁紹  
小野 優菜  
西明 真弥  
足利 大輔  
梯 妙花  
長田 晃声  
藤尾 見吾

千葉 康功  
栗田 弘智  
原 大真  
(近畿大学 文芸学部)  
柿原 光暉  
河上 秀郎  
西明 大智  
山本 顯生

# 新たなる佛教者の実践のあり方を巡って-前-

現代社会で、宗教はいま厳しい状況下にある。  
その中で佛教者は、佛教に関心のない人にどうはたらきかけられるのか。

今回、佛教の専門家・アイドル・学生という特色ある5人が集まり話し合った。



てら＊ぱるむす  
文殊たまさん 勢崎至恩さん



龍谷大学  
亀山隆彦先生



龍谷大学 実践真宗学研究科  
小野優菜 足利大輔



**足利 文殊** まずは「てら＊ぱるむす」の文殊たまさんから自己紹介をお願いします。

「てら＊ぱるむす」の文殊たまと申します。私達「てら＊ぱるむす」は、「煩惱多き衆生と共に修行する」というコンセプトの浄土系アイドルグループです。京都市下京区にある浄土宗のお寺、龍岸寺<sup>\*1</sup>を拠点に活動しています。「てら＊ぱるむす」は、「煩惱多き衆生と共に修行する」というコンセプトで、ファンの皆さんと私達と一緒に成長していくこういうグループです。「衆生とともに修行する」というコンセプトの中には、一緒にお寺の文化や、お寺の歴史、仏教美術等をみんなで勉強していくこうという意味合いが含まれています。私達自身は布教者やお寺の娘ではありません。なので、「衆生とともに修行する」というコンセプトには、私達がこのアイドルグループの活動の中で実際にお寺に行き勉強をし、仏教のことをもつと学んでいく、という意味合いも含んでいます。また、協力してくださっているのは、池口ご住職<sup>\*2</sup>と楽曲プロデュース、メンバー、スタッフのチームを作つており、ほぼ学生で活動しているグループです。学生以外に協力してくださっているのは、池をして頂いている方くらいで、基

**亀山 文殊・勢崎** そうですそうです！

**亀山** それは『てらぱる通信』<sup>\*4</sup>ですか？

**勢崎** 私は紫担当の勢崎至恩です。私は主に仏像彫刻を色々とやっています。私は主に仏像彫刻を色々とやつていて、ツイキヤス<sup>\*3</sup>やライブで仏像を彫ったりしています。また「てら＊ぱるむす」の楽曲の中にも仏像の歌があります。

**文殊** あと私たちは、できるだけ私たちの存在を知つていただこうと思い、フリーペーパーを作成し、アイドルライブなどの時に配つてています。

本的には学生達の力で衣装や、ライブの演出、グッズを制作して、どちらかというと佛教やお寺であります。そして私、文殊たまは、主に写真を撮るのが得意としていて、少しお寺の活動とははずれています。そして私が撮影をしたもので、今

\*1 「てら＊ぱるむす」の拠点寺院。参照「浄土宗龍岸寺」(<http://ryuganji.jp>) 閲覧日：2019年2月25日)

\*2 池口 龍法(いけぐちりゅうほう)1980年9月7日兵庫県出身。兵庫教区伊丹組西明寺に生まれる。京都大学、同大学院に進学。大学院中退後、2005年4月より知恩院に奉職。現在は編集主幹をつとめる。2014年6月より京都教区大宮組龍岸寺住職として、念仏フェス「十夜祭」「超十夜祭」や浄土系アイドル「てら＊ぱるむす」の運営を手がける。参照「浄土宗龍岸寺、スタッフ、池口 龍法」(<http://ryuganji.jp/staff/ikeguchiruho/>) 閲覧日：2019年2月25日)

\*3 TwitCastingの略。SNSへの動画ライブ配信サービス。

\*4 「てら＊ぱるむす」公式のフリーペーパー。また公式ホームページにて配信も行なっている。参照「てら＊ぱるむす、てらぱる通信」(<https://terapalms.themedia.jp/posts/categories/1696470/page/1?type=magazine>) 閲覧日：2019年2月25日)

## 勢崎

その『てらばる通信』に、私の仏像のコラムも掲載されてしまう。『てらばる通信』は全5回ほど出していく、公式サイトでは今2つ公開しており、これから少しずつ公開していく予定です。

## 文殊

あともう一人、今日は来られなかつたんですけど、観咲千世乃(みさきちせの)\*1という赤色担当のメンバーがおります。彼女はイラストやデザインを得意としていて、『てらばる通信』の新しいロゴができるのですが、それは千世乃が作ってくれました。またTシャツのイラスト描いてくれたりだとかしてイラスト、デザインでのアートワークを主にしています。ただ私達(文殊・勢崎)は、どつちらかといふと落ち着いているんですけど、この子だけキャラがちょっと、なんか、ネジ外れたくらい楽しむ:感じで…。

## 一同

笑文殊  
文殊 まあ、すごいキヤッキヤしてゐる子がいます笑。でもパッと明るくしてくれる子なんですね。

## 足利

ありがとうございます。それでは亀山先生、自己紹介をお願いします。

亀山 龍谷大学で非常勤講師と研究員をやっています亀山と申します。

基本的に僕は仏教の文献学や思想研究といった、お寺の蔵にあるお経などを調査して読んで、論文を書くというスタンスの

研究をやっています。一方で、個人的な趣味がこうじて、現代美術のお手伝いするようになります。

した。例えば去年、福島県いわき市の泉地区で、『カオス\*ラウンジ新芸術祭2017市街劇「百五〇年の孤独』\*2という現代美術

代の廃仏毀釈をテーマに、それを

比喩に使いながら現代美術や福島の問題を見せていくという展示です。

このイベントは、お寺や

仏教を使った展示でして、この時

に、例えれば地獄を表現したり極楽

を表現したり、阿弥陀様を使つた

り、あるいは大日如来をテーマに

したりしました。僕はそういう表

現があつて、かどうか、思想的

に大丈夫かどうかを裏方として

いた。また、僕自身もいわき市に行

つて、イベントに関連する講義を

二回ぐらいやりました。このよう

な形で現代美術に関りながら、仏教に関心を持っている現代アーティストに裏方として協力する

ということをやっています。

## 足利

亀山先生、ありがとうございます。それでは小野さん、自己紹介をお願いします。

小野 奈良県の橿原神宮の近くから来ました、小野優菜と申します。現在は龍谷大学の院生

ですが、大学は相愛大学というところに所属しております。

そこで釈徹宗先生\*4から、龍谷

大学の実践真宗学研究科に関するお話を伺いして、初めて

その存在を知りました。机に向かって文献を調べるといった一

般的な大学院の研究スタイルに加え、外に出て活動しながら

研究していく実践真宗学研究科のあり方に惹かれ、所属する

事となりました。現在、私は「若者

者の寺離れ」をテーマに研究しています。私達の世代の人にとって、お寺は気軽に行けるよう

な所ではなく、そもそもお寺つて何をしてるところか分から

ないという人も少なくあります。

せん。そのような中、お寺の莊嚴さというものを保持しつつ、

彼らがスッとお寺に入つていけるようにするにはどうすれば良いのか、アンケートなどを取りながら研究しております。



\*1 観崎千世乃(みさきちせの)「てらばるむす」センター。赤色担当。

\*2 2017年冬、福島県いわき市泉地区で開催された、現代アート集団「カオス\*ラウンジ」による芸術展『カオス\*ラウンジ新芸術祭2017市街劇「百五〇年の孤独』』のこと。東日本大震災の復興を、明治時代の神仏分離令から始まる廃仏毀釈後の「復興の失敗」と重ねた現代芸術の展示。参照「カオス\*ラウンジ」、カオス\*ラウンジ新芸術祭2017市街劇「百五〇年の孤独」公式ホームページ」(<http://chaosxlounge.com/sp/jigoku.html>)閲覧日:2019年2月25日)

\*3 梅沢和木、黒瀬陽平、藤城嘘の3名による現代アート集団、及び企画。

\*4 釈徹宗(しゃくてつしゅう)1961年生まれ。浄土真宗本願寺派如来寺住職。相愛大学人文学部教授。



# 「入り口としての仏教の実践」 から 「本質としての仏教」

**足利** 小野さんありがとうございます。最後に僕の自己紹介を少しだけ。僕は龍谷大学実践真宗学研究科に所属しています。僕は普段の研究で、浄土真宗の宗祖親鸞聖人の思想について、そこに他者論という問題系を接続した時、それはどの科では、読んで字のごとく「実践」と書いてあるので、様々な宗教的な実践活動をするわけですが、その際に色々な場面で色々な「他者」に出会います。その時に浄土真宗の僧侶はどういう風にして「他者」に向き合っていくのかということを、親鸞思想や浄土真宗の教義の上から研究しています。

**足利** さて、僕の自己紹介はこの辺りで留めておくとして、それでは早速本題に入つていいこうと思います。今回の座談会では、テーマを「新たなる仏教者の実践のあり方をめぐつて」としています。最初に今回の座談会の趣旨を説明します。まず前提として、現代において宗教を取り巻く現状にはとても難しいものがあります。その中で、佛教者は仏教に関心のない人々にどうにか関心をもつてもらうために、「入り口となるような仏教の実践」というものを考

えてきました。例えば照恩寺テクノ法要<sup>\*1</sup>とかフリーマガジン『フリースタルな僧侶達』<sup>\*2</sup>などが「入り口となる仏教の実践」の例として考えられると思います。そういった動きは、奇抜なアイデアや目新しさから、メディアに取り上げられ話題になることも多いです。そのような状況の中、「てら＊ぱるむす」さんはお寺・仏教文化を盛り上げるべく、仏教美術やお寺文化から仏教を捉え仏教文化を衣装やパフォーマンス等に取り入れる「淨土系アイドル」として活動されています。まさにここで言う「入り口としての仏教の実践」の代表的な存在として位置づけられます。だと、「入り口としての仏教の実践」は、わりと最近の話題で、世間一般にはまだまだ認識されていない部分もあると思います。また、「入り口としての仏教の実践」から「本質としての仏教」、つまり本質の仏教理解に至るまでの難しい部分があると思います。そこには、佛教者にとって越えなければならない壁がある。そこで今回の座談会では、まず仏教の「入り口としての仮想の実践」の現状を認識するべく、「てら＊ぱるむす」のメンバーである文殊たまさん

と勢崎至恩さんにお話を伺いたいと思います。そして、そのような文脈を踏まえつつ、龍谷大学で教鞭を取られつつ「日本仏教と現代芸術の架橋する可能性」を考えいらっしゃる仏教学の亀山隆彦先生と、龍谷大学実践真宗学研究科にて「若者の仏教への関心」を研究されている小野優菜さんにも加わってもらい、入り口に留まるこの新しい「新たなる仏教者の実践のあり方」をめぐつて議論したいと思います。本日はよろしくお願いします。

**足利** まず「てら＊ぱるむす」とは何か

**足利** まず「てら＊ぱるむす」さんの「お二人に質問したいのが淨土系アイドル」「てら＊ぱるむす」として、文殊さんと勢崎さんが活動することになったその経緯についてお話ししていただけないでしょうか。

**文殊** はい。では私から。私は2016年の秋に行われた「十夜フェス」<sup>\*3</sup>というイベントをきっかけに「てら＊ぱるむす」に加入しました。「十夜フェス」は2015年から浄土宗のお寺さんやいくつかのお寺さんと芸大生が中心となって、「十夜法要」を現代風にリメイクし、その文化・伝統を継承していくこ

\*1 福井県の照恩寺 朝倉行宣住職による新しい法要の形。「極楽浄土は光の世界」という認識のもと、テクノポップと伝統的な読経を合わせたもの。参照「浄土真宗本願寺派 照恩寺 WebSite, 法要とは」(<https://www.show-on-g.com/techno-hoyo>) 閲覧日: 2019年2月25日)

\*2 宗派を超えた僧侶と仏教ファンのコミュニティ。また2009年から発行されているフリーマガジンのこと。

\*3 天台宗、浄土宗、時宗で行われる十夜法要をベースに、京都の学生と寺院、僧侶によりアレンジしたアートフェス。参照「十夜祭 JU YA FES」(<https://www.juyafes.jp/>) 閲覧日: 2019年2月25日)

うという取り組みです。その二年目の「十夜フェス」の時に、ある一人の女子大生がお寺でアイドルを作りたいっていうのがきっかけで始まったのが、「てら＊ぱるむす」です。彼女からその中のメンバーになつてくれないかと誘われてデビューしたというのが、私の経緯です。

**勢崎** 次に私ですが、私はちょうど一年前、去年の今日がデビューディなんですよ。笑

**足利** おお！おめでとうござります！

**勢崎** ありがとうございます。

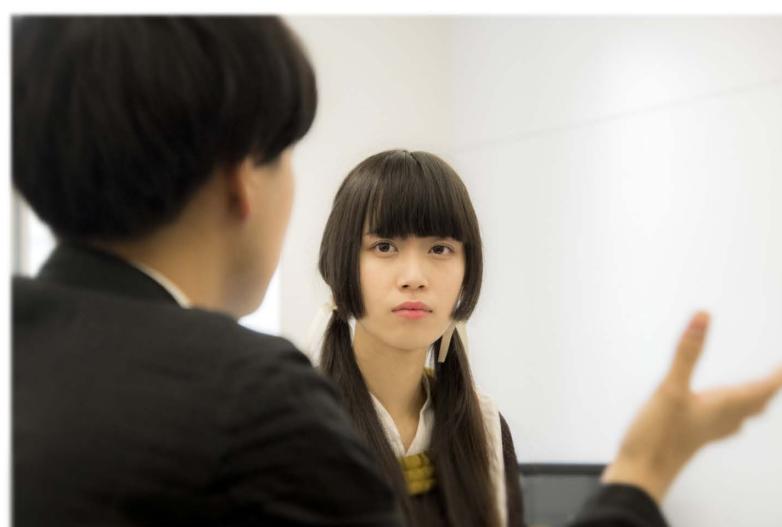
笑 経緯としては、私は最初「てら＊ぱるむす」のファンとしてライブを見に行きました。初めての地下アイドルライブも「てら＊ぱるむす」です。なぜ「てら＊ぱるむす」を見に行つたかと言ふと、もともとお寺とかの建築物が好きで、寺院仏閣の方をメインに見に行つて、写真を撮つたりしてました。なので正直なこと言うと、その時は仏像などの知識はあまり知らなかつたです。それで「てら＊ぱるむす」というアイドルがいるよつていでので見に行つたのですが、その後プロデューサーにスカウトして頂きました。笑

なるほど。当初「てら＊ぱるむす」は「十夜フェス」の一つのコンテンツだつたわけですが

それが今では龍岸寺さんをベースとしてしつかりと活動され、規模も大きくなっています。それほどのようにして活動が広がつていいたのでしょうか？

**亀山** これは難しい質問なので、僕の方から少し補足します。といいますのも、まず「十夜フェス」というのは、元々浄土宗や天台宗が行つている『無量寿經』といふお經に基づく法要がベースです。それを盛り上げるために、京都にいらつしやる学生と協力するという方向性がまず一つあります！その中で、「てら＊ぱるむす」さんは最初から期間限定のグループとして、龍岸寺さんでパフォーマンスをするという前提で結成しておられます。しかしその頃と今とでは、明らかに方向性が変わつているなと感じました。といいますのも、僕が個人的集めた情報を見る限り、仏教を応援するというメッセージは、当初の「てら＊ぱるむす」においては、そこまで明確でないという印象があります。また、

文殊 当初は、三日だけのイベントを盛り上げるためのアイドルグループといいますか、悪く言えばただ集められた女の子たちぐらいのテンションでした。しかし、皆はステージパフォーマンスが好きな子が多く、私も最初はどうちらかというとそうでもした。なのでお寺や仏教などに興味は正直ありませんでした。ただ、そのステージパフォーマンスをずっと行つてきて、歌つたり踊つたり人前でする事がとても好きだったので、「やってみない？」と声をかけられたときには、「じゃあ、やつてみる」という事がスタートでした。もちろんお寺建築が好きだった子もいたのですが、私と同じような子も何人かいて、本当に最初はただお寺建築が好きだった子もいたのです。しかし、意外と周りの方の反応がよく、池口住職も「せっかくイブをする、つていう感じでした。しかし、意外と周りの方の反応がよく、池口住職も「せっかくやし、続けていけるんやつたら、もつとしつかりとベースを作つてやつたらいいんじやないか」というアドバイスをいただいて現在のような形になつていきました。



## お寺の一員としてのアイドル



**足利**

なるほど。では、そのような中で「てら＊ばるむす」として活動してきた、仏教に対してどのように関心を持つようになつてきましたか？

**文殊** 私はそもそも仏教に興味がありませんでしたので、それこそお寺に行く理由というとお葬式ぐらいでした。あるいは、お坊さんがお盆のときに家に来てくださってお経をあげる、ぐらいでしか仏教との繋がりがありませんでした。しかし、実際に龍岸寺に足を運ぶようになり「てら＊ばるむす」として活動するようになつてから、例えはドラマなどでよくわからない仏教の使われ方を観た時には「え、なんだ今、般若心経読んでるの？」といった感じで、パッと反応できるようになりました。また先ほど、こちら（龍谷大学大宮キャンパス）に来るときに仏具屋さんの前を通ってきたのですが、



**龜山**

アイドルという形でお寺に関わるのは、結構変則的ではあるんですが、これまでの仏教の歴史からそのことを考えると、主体的にお寺に関わることで知識を得たり関心が深まつたりする。つまり、お寺の一員にならないと、「てら＊ばるむす」さんのように、仏教に興味を持つようにはならないということでしょうか？

**文殊**

そうですね。

**足利**

だから外から見ただけではダメだということですよね。

**文殊**

そう思いますね。お寺の一員となつたという感覚はありますか？

**足利**

ありますね。年末の大掃除とかに呼んでもらえることは大きいなと思います。例えば、仏具等を動かして、元のあつた場所に戻すといったことはフラン

トと来られた方ではできないじゃないですか。それは龍岸寺で活動するアイドルだからこそなのではないかと思いますね。

**文殊**

ありますね。年未の大掃除とかに呼んでもらえることは大きいなと思います。例えば、仏具等を動かして、元のあつた場所に戻すといったことはフラン

**龜山** なるほど。ということは、初期の頃に集まつた皆さんには、本当に期間限定が前提で集まつているということですか？

**文殊** そうです。そうですね。亀山 繼続する可能性は一切なかつたのですか？

**文殊** なあつたです。おそらく、龍岸寺の池口住職もここまで続くとは思つていなかつたのではなかつたのかと思ひます。

**足利** もともとは仏教にコミットするようなことはなかつたがてら＊ばるむす」に入つて、実際に少しずつ関わっていくようになります。仏教と繋がつていくようになつていつたわけですね。

**文殊** そうですね。はい。



**足利** なるほど。では、そのような中で「てら＊ばるむす」として活動してきた、仏教に対してどのように関心を持つようになつてきましたか？

**文殊** 私はそもそも仏教に興味がありませんでしたので、それこそお寺に行く理由というとお葬式ぐらいでした。あるいは、お坊さんがお盆のときに家に来てくださってお経をあげる、ぐらいでしか仏教との繋がりがありました。しかし、実際に龍岸寺に足を運ぶようになり「てら＊ばるむす」として活動するようになつてから、例えはドラマなどでよくわからない仏教の使われ方を観た時には「え、なんだ今、般若心経読んでるの？」といった感じで、パッと反応できるようになりました。また先ほど、こちら（龍谷大学大宮キャンパス）に来るときに仏具屋さんの前を通ってきたのですが、

**龜山** アイドルという形でお寺に関わるのは、結構変則的ではあるんですが、これまでの仏教の歴史からそのことを考えると、主体的にお寺に関わることで知識を得たり関心が深まつたりする。つまり、お寺の一員にならないと、「てら＊ばるむす」さんのように、仏教に興味を持つようにはならないということでしょうね。

**足利** ありがとうございます。お寺の一員となつたといふ感覚はありますか？

**文殊** ありますね。年末の大掃除とかに呼んでもらえることは大きいなと思います。例えば、仏具等を動かして、元のあつた場所に戻すといったことはフラン

トと来られた方ではできないじゃないですか。それは龍岸寺で活動するアイドルだからこそなのではないかと思いますね。

**足利** ありがとうございます。お寺の一員となつたといふ感覚はありますか？

**文殊** ありますね。年末の大掃除とかに呼んでもらえることは大きいなと思います。例えば、仏具等を動かして、元のあつた場所に戻すといったことはフラン

トと来られた方ではできないんじゃないですか。それは龍岸寺で活動するアイドルだからこそなのではないかと思いますね。

## 足利

なるほど。例えば従来からある佛教婦人会<sup>\*1</sup>といつた、お寺をサポートする檀家さんの集まりがありますが、現代の多様な価値観の中で、佛教婦人会とは別のあり方でお寺をサポートする檀家さんのあり方とか考えれそうですね。ここで小野さんは「若者にお寺に来てもらえないには」というテーマで研究されていますが、今の話を聞いて、小野さんの研究している部分と何か繋がる部分はありますか?



## 文殊

いう反応が伺えました。確かに、「莊嚴さが欠けてしまってんじゃないか」という意見はありますね。私達の活動においても、「お寺への敷居が良い意味で低くなつて入りやすくなついいんじゃない」とおっしゃる方がいる反面、やはり莊嚴さであつたり静かな雰囲気というのを絶対に守つてほしいと思われる方も一定数はいらっしゃるので、小野さんのお話を聞いて「やっぱりそうなんだなー」という事はすごく思いました。

## 足利

私は若者の実態調査の際には、紙面によるアンケート調査ではなく、実際に対面して聞き取りをする形で行なつています。そこでよく聞くのが「莊嚴さみたいなものがあるからこそ、簡単に興味を持つていいのかわからない」ということでした。また「お寺に行つていいのかもわからない」ということを聞くことも多い。他にもお寺のイベント情報を相手に伝え、「こういうことをされている所もあるけれど、行きたいと思いますか?」という質問もしてみたところ、そういういつたイベントの認知度は低く、興味を持つ方もいますが「お寺の莊嚴さ」というところがネットになり、「それってお寺でやつていいのか?入りやすい雰囲気にしすぎてもいいのか?」と

## 小野

### 実存と結びつくアイドルと仏教

しかし「てら＊ぱるむす」さんの活動のプラスの面を言えば、敷居を低くしていったと言えますよね。そういうふた活動において「てら＊ぱるむす」さんはアートの視点でお寺を盛り上げていくということで、例えは衣装やパフォーマンスに仏教要素を取り入れたりされていますが、自身の中でアートと仏教とアーティストというものがどのように結び付いてるのでしょうか。

## 文殊

最初結成したときに、そもそもアイドルとは「アートである」という捉え方をしていて、「仮想×アイドル」というキーワードについて考えていました。どうしてアートなのかというと、当

時関わっていた人たちが基本的に芸大生ばかりだったという事もあり、自分たちの得意分野から仏教を見たいという意識がありました。それでアイドルというコンテンツを使って仏教を表現しようという事になりました。なので「てら＊ぱるむす」というのが、そもそも「仏教×アート×アイドル」の体現化するような存在なんだという思いがあります。あと、「宗教と美術は切っても切れない関係にあるものだ」と思つていて、例えばお寺の建築や仏画、仏像もそうですが、もつと広く言えば、キリスト教だと讃美歌があつたりしますよね。それらは無理やり結び付けてるものではなく、そもそも結び付いているものではないかなという思いは、私の中ではあります。ただ宗教的な見方と美術的な見方というのはやはり違つてます。宗教的見方に感銘を受けたからお寺に来ました、という方もいらっしゃるしやれば、建築物や仏像が好きだから来ました、という方も勿論いらつしやいます。こここの違いを私の中ではまだ全然噛み合っていないので、「どうしていこうか」と考えるところはありますね。

## 龜山

「アイドル」というキーワードについて考えるに、狭い意味での日本のアイドルは、世代ごとでかなりイメージが違つてますね。

\*1 浄土真宗における佛教婦人会は、浄土真宗のみ教えをよろこび、依りどころとする者の集まりであり、親鸞聖人がお説きになった浄土真宗のみ教えを聞かせていただくことを活動の根本とする組織である。天保3年に佛教婦人会の前身である最勝講の結成のご消息が出され、全国各地に「最勝講」が発足されると、門信徒婦人の意識を高めていき、各地で婦人教会が結成される。1904年には真宗婦人会が設立され、1907年には佛教婦人会と称されるようになり、1947年には現在の「佛教婦人会連盟」が結成され、今に至る。参考「浄土真宗本願寺派佛教婦人会総連盟 佛教婦人会とは?」(<http://buppu.hongwanji.or.jp/>)閲覧日:2019年2月25日)

# アイドルを使えば、菩薩だって この世で表現できるんじゃないかな

いると思います。元々アイドルは、街のない言い方をすれば、割と男性向けの欲望が前面に出たエンターテイメントでしたが、今はそうじやない。そこに、ある種の実存の問題が関わっていると思います。例えば僕の世代だと、僕らの憧れの対象として、ロックバンドとかラップミュージックがあつたわけですが、それに対する思い入れとして、「自分もあんなついてきたい」という思いがすごく強くありました。同じように、例えば今日の女子はおそらくアイドルに自己を投影する、つまり自身のある種の理想形みたいなものとしてアイドルがあつて、それは、ある世代以上の男性が持つてるアイドル像とは全然違うんですね。だから、アイドルをめぐる理解の違いをまず認識しないと、「てら＊ぱるむす」さんの仏教とアイドルを結びつける試みも誤解されてしまう気がします。つまり、アイドルが仏教に入ってくることに対して、おそらく僕ら世代からすると「ん？」となってしまふ所があるかもしれないが、そういうことではないのだと思う。それは自分の実存と関わっていくから、むしろアイドルが仏教に入ることで、「仏教とアート」のようなものの関係が増幅され

たり、自分と自分以外のものとの間で両者を繋いだり、いろんな価値を混ぜ合わせるような存在として、アイドルはあるので、アイドルであることの方が必然的で、ドルであることが必然的で、「あ、そうか！アイドルを使えば菩薩だってこの世で表現できるんじゃないのか」という発想の方が重要になつてくる。それはつまり、アイドル文化とお寺を結びつけることにおいて、「アイドル文化におけるファンの実存」は重要な柱になつていて、両者の結びつきには必然性があると言えるのではないか。文殊 文殊 面白い指摘ですね。そうだと思います。



すごくびっくりしましたし、嬉しかったですね。  
**足利** そういえば、今アイドルってすごく増えているみたいですね。

**文殊** 地下アイドルも含めて全国で5000グループ以上<sup>\*1</sup>はあるみたいですね。私達はどちらかといえば地下アイドルに分類されると思います。

※ 後編は次号掲載となります。

\*1 大きな事務所に所属せずにライブ活動をするインディーズアイドルのことを「地下アイドル」という。その地下アイドルまで合わせると、アイドルの総数は相当な数にのぼるのではないかといわれている。参照「地下アイドルの収入と出費を実例で紹介。ツーショット写真1000円で食べていけるのか？」([https://eonet.jp/zine/articles/\\_4102465.html](https://eonet.jp/zine/articles/_4102465.html) 閲覧日2019年2月23日)  
参照「全国で3000組がシーンを牽引、“アイドル戦国時代”のその先は？」(<https://www.oricon.co.jp/news/2076166/full/> 閲覧日2019年2月23日)

# 私の活動・研究

SORYO for Everything

実践真宗学研究科に足を踏み入れてから一年が経とうとしています。私が本研究科への入学を志したのは、次の三つの強い思いがあつたからです。

まず、龍谷大学で四年間培ってきた浄土真宗のみ教えについての学びを、さらに深めていきたいという思い。

次に、私自身が今後僧侶として具体的にどのようなアクションを起こしていくべき良いのかを考えたいという思い。

そして最後に、将来布教使としてあらゆる場所でご法話するための研鑽を積みたいという思い。

以上のような思いは、本研究科入学後も変わらずにずっと持ち続けています。

これらの思いに支えられながら、本研究科生としての最初の一年間は、教義や伝道等に関する講義（座学）を中心としつつ、医療現場（緩和ケア病棟）での、僧侶の役割について学んだ「ビハーラ研修」や、ドイツから来られた留学生との交流を通して、いかにして他宗教との対話をすることができるのかを考えた「宗教間対話実習」など、より実践的・学際的な学びも同時に深めできました。

さらには、大学以外での個人的な取り組みとしては、本願寺でのお聴聞の場に数多く足を運び、全国各地のお寺から来られる、様々な布教使のご法話を聞かせていただきました。ご法話の内容や話し方など、あらゆることを毎回学ぶことができました。

仏教は「生老病死」の苦しみを超えていく道です。「いのち」の問題の解決というのが、仏教の根本にはあります。

当然このことは浄土真宗でも例外ではありません。しかし、現代の社会を見渡してみると、人々が常日頃から「いのち」の問題に向き合う姿というのは、なかなか見受けられないようです。

むしろ、「病気」や「死」などというものをなるべく避けて生きているのが私たちの姿ではないでしょうか。

淨土真宗のみ教えを学び、伝えようとしている私にとって、そのような現実は見過ごせないものでした。

そこで、「いのち」というものをテーマとして設定しようと思ったのです。

一年次でのゼミの研究発表では、仏教・真宗の教義的側面から「いのち」について考究するとともに、医療の側から見た「いのち」の問題についても考察しました。医療もまた仏教と同じように、「いのち」（生老病死）の課題に取り組んでいます。

今後は、お寺のご法座として「『いのち』の法話」をする可能性について研究を進めていきたいと考えています。

私たちはどうしても、大切な人の死や自分自身の病気等を経験する時にやつと「いのち」について考えますが、それよりもっと前に「いのち」について深く考える場として、お寺のご法座の可能性を強く感じています。

「『いのち』の法話」を開催することを目標として設定し、その実現のためにこれまで同様、教義的な研究を続けていきます。

またそれとともに、医療と仏教の両方に深く携わってこられた方々との交流や、「いのち」に関わる人々の意識調査等に努めています。



# 患者の意志決定における臨床宗教師の支援の可能性 ～真宗僧侶の視点から～

欧米の医療現場では、布教伝道を目的とせず、患者さんの心のケアを目的としたチャップレンと呼ばれる宗教者の方がおられます。このチャップレンの役割として、インフォームド・コンセントをはじめ、病名告知や患者、家族の重大な決断の場面でのサポート、また、臓器移植や生命維持装置の取り外しなどの死に関わる意思決定の場面で、宗教者が、患者さんやその家族の方の意思決定を支えることがあげられます。

私は、終末期における意思決定には、患者さんやその家族の方のスピリチュアリティが大きくかかわってくると考えています。そのような状況の中で、お医者さんだけでなく、チャップレンのような宗教者が、歐米と同様に、日本でも、患者さんやその家族の方の意思決定支援を行うことができないかと考えました。



現在、日本では、病院や被災地、福祉施設などの公共空間で、布教伝道を目的とせず、苦難や悲嘆を抱える人々に寄り添う臨床宗教師とよばれる宗教者の活躍が注目され始めています。この臨床宗教師という言葉は、欧米のチャップレンに対応する日本語として考えられています。私は、自身の臨床宗教師実習の経験もあって、この臨床宗教師が、患者さんやその家族の方の意思決定支援に関わることができなかっかと考えました。臨床宗教師が、一支援者として、患者さんやその家族の方の苦悩に対して、寄り添い、傾聴することを通して、生命観、死生観などの価値観を整理することが、意思決定支援において大きな意味をもたらすのではないかと考えています。さらに、カンファレンスなどの場面で、患者さんやその家族が、お医者さんに伝えられなかつた想いを、臨床宗教師が、代わりに伝えてあげることも支援につながると考えています。

また、終末期などの重大な意思決定の現場では、患者さんやその家族の想いが移ろいやすく、選択によつては、後悔や苦悩を抱えてしまうケースや、お医者さんが、意思決定を支えていく上で、同様に後悔や苦悩を抱えてしまうケースなどが存在すると思います。そうした場面においても、臨床宗教師が関わっていくことでケアしていくことができるのではないかと考えます。

しかしながら、臨床宗教師として医療現場に赴く際には、公共性の担保が求められるため、その現場のルール上、臨床宗教師として、踏み込んでいくことのできる部分とできない部分が生まれてしまいます。私は、臨床宗教師の意思決定支援は、まだ、医療現場においての理解や信頼をあまり得られていないことを含め、多くの課題があるとも考へています。

よつて、実際に医療現場で働かれている臨床教師の方々の聴き取り調査などを通じて、臨床宗教師としての活動の限界性を調査し、さらに、一真宗僧侶に立ち返り、臨床宗教師の立場では取り組めないことについて、菩提寺と門徒との関係性の中で、僧侶が、自己決定の問題に取り組んでいくことができなかっかということも研究していきたいと考えています。



目的に、2009年、新たに「実践真宗学研究科」が、龍谷大学大学院に創設されました。その設置趣旨  
本研究科では宗教実践の研究を推進するとともに、多岐にわたる現場で活躍する宗教者を、修了生と

龍谷大学大学院 実践真宗学研究科創設10周年記念行事 開催趣旨より



本研究科が創設10周年を迎えるにあたり、関係者、修了生をはじめ、宗教者の実践活動に心を寄せる方が、一堂に会する記念行事、シンポジウムを開催した。「いまを生きる宗教者×現代社会」というテーマで、この記念行事、シンポジウムを通じて、本研究科の10年の歩みを振り返った。

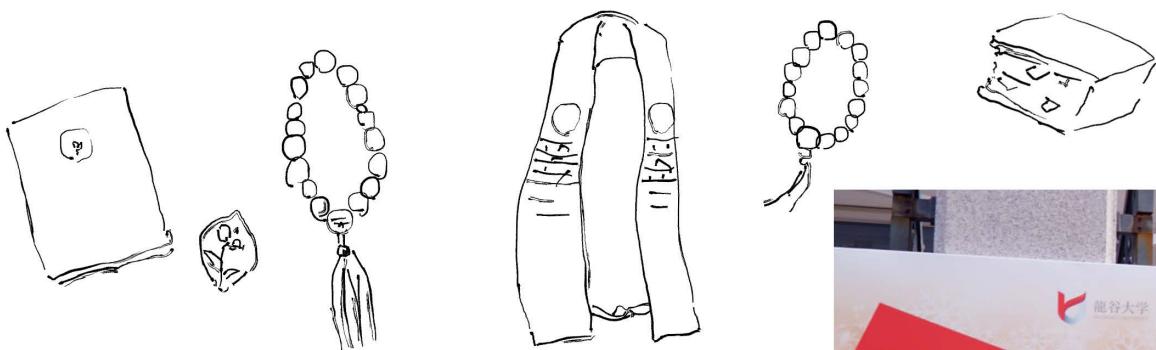
シンポジウムでは、私たちの原点を確認するとともに、現代に求められる宗教実践への新たな挑戦に向かってのクロストークを行なった。第一部は報恩講のお勤めと名越康文による特別公演、第二部は記念ムービーの上映、在学生と教員によるクロストーク、実践活動の「LIFE SONGS」による音楽ライブが行われた。

第二部では、10年の歩みを集約したムービー上映後、在学生と教員、修了生と教員によるクロストーク、「LIFE SONGS」による音楽ライブが行われた。クロストークでは、設立当初の先輩たちの想いや、これから社会の中での佛教者の実践などさまざまなお話が展開された。修了生とのクロストークでは、「グチコレ」「ジッセンジャー」「のさま」ともしえ等の、活動当初のエピソードや、在学当時のエピソード等大学院時代の思い出を語りつつ、佛教者が社会にどう関わっていくか、というこれまでの「実践」についても熱く議論した。

さまざまな問題がひしめく現代社会の中で、浄土真宗、そして宗教者のあり方を実践的に考えることを、「宗教的実践の研究者」「専門的実践者」の育成が目的とありますように、現在に至るまでの10年間、して送り出し続けています。



最後の締めくくりたのは  
実践活動の「LIFE SONGS」  
のスペシャル音楽ライブ。  
弾き語り・音楽ライブを通して「いのち」や「人生」について、また自己を見つめる大切な時間を共有した。癒しとともに、笑顔がたくさん溢れ、そしてたくさんの拍手をいただいた。



10年前とは違った悩み、苦しみ、問題が生まれて来ている。10年後、私たちには想像もできない問題が起っているだろう。それと同じように、私たちに想像できない、新たな活動、考え方、そして安心を与える実践活動をこの実践真宗研究科から発信していくなければならない。

そう強く考えさせられた、10年という歴史である。

今回、本研究科は10周年を迎えることでも新たな課題、そして可能性を見出すことができた。2009年の春に、慣れない「実践真宗研究科」という名前で始まった本研究科。いまでは“実践”といえば本研究科のことと定着するまでになった。



文 千葉康功

# JISSEN

本研究科は今年度、創立10周年を迎えました。

この広報誌「JISSEN」もNo.9。年に一度の発刊なので「JISSEN」が誕生してから9年が経ったということです。多くの先輩方のお顔、お言葉が「JISSEN」で見ることができます。また発刊されたときの世相、出来事も読み取れます。

毎年違い、たくさんの色を持った実践真宗学研究科を、修士論文やレポートとはまた違うこの「JISSEN」が教えてくれました。

このような、数ページ、重さにすれば300グラムにも満たない冊子ですが、紡いでくださった歴史、制作するうえでの責任、大きなやりがいを感じながら1年を通して作ってまいりました。制作に際しまして「100年後も読まれるもの」と肩をたたかれました。この編集後記を2019年に、実践真宗学研究科110期生の出版活動部会の後輩たちが「JISSEN」No.109の制作の際に読んで参考にしてくれたら、とても嬉しいですね。そのときはもう紙媒体ではないのでしょうか？実践真宗学研究科の発展が楽しみです。

最後になりましたが、来年度から新たな発刊物を皆様にお届けできますよう、後輩たち(記念すべき10期生たち)がいま一生懸命準備をしてくれています。ご期待ください。私が深くこの出版活動部会に関われるのもこの「JISSEN」No.9が最後です。この「JISSEN」の制作に、実践真宗学研究科の歴史に関わったことを心から光栄に思います。これからもどうか実践真宗学研究科をよろしくお願ひいたします。

2年次生 木村 友譲

『JISSEN No.9』

2019年3月 発行  
発行：実践真宗学研究科 出版活動部会

〒600-8268  
京都市下京区七条大宮東入大工町 125-1  
龍谷大学清風館 3F 実践真宗学研究科合同研究室  
TEL 075-366-0621

\*この活動情報誌「JISSEN」は、龍谷大学実践真宗学研究科の院生が、実習の一環として主体的に取り組み発行するものです。

私にとって、本当に生きていることの喜び、そして生かされていることの有り難さを実感させられる日が突然やってきました。大学で学生生活を送っていたある日のことでした。私の健康診断の結果に暗い影が落ちました。再検査をしましたが、結果は芳しくなく、ついには病院で詳しく調べるほどの事態となってしまいました。

「腎臓が悪くなっていた」という結果でした。このまま悪くなってしまっては、いずれは透析も考えなければならなくなると言われてしまい、その時の私は自分の未来が真っ暗になっていくようでした。そして先生からは、薬を毎日飲むことを伝えられ、薬局で受け取った薬がずっしりと重く、その時になってようやく私は、これまで健康に健やかに生きていたということが、いかに有り難いものなのかを身をもって知ることとなりました。

家に帰ると、医師の結果を聞いていた母が、ある手帳を見せてくれました。そこには、びっしりと検査結果や医師のアドバイスが書かれています。私が聞き逃していたような言葉まで、一言一句聞き逃すまいとする、必死な思いがその手帳から伝わってきました。思い返せば、再検査の時でも、過去の私の病気の詳しい記録を引っ張り出して、医師に伝えてくれたのは母でした。母が伝えた記録があったからこそ、今の私の身体の詳しい状態が分かったことでした。

私は、心の何処かで「一人で生きている」「生きていて当たり前」と思い込んでいました。母の思いを通して、自分の命をこれほどまでに誰かに思われていて、守られて生きていることを初めて実感しました。分かっているつもりでもなかなか実感できない本当に大切なことが、私の目の前にありました。そのときに、私は母に「ありがとう」と心から伝えることができました。母は、それが何でもないようにうなずいていて、それは苦労とも感じないほどに私のことを第一におもってくれている何よりの証拠でした。私はその有り難さを感じ、ただ涙しました。

そのとき、思い出されたのが阿弥陀様のお慈悲のお心でした。私を第一に思い、ただひたすら私を救いたいと願ってくださる阿弥陀様のお心を、母の心配してくれている姿を通して知ることができました。生きていてほしい、幸せになってほしいと言う母の願いによって生かされました。願われて生きていることの有り難さを親の思いに触れたことで、ようやく知ることができました。

誰かに願われて生きている。それは、なかなか気づけるものではありません。けれども、阿弥陀様に願われて生きている……私たち一人一人を阿弥陀様が救いたいと願い、導いてくださっているということは、確かな真実です。私たちの歩む先が阿弥陀様に示されて明らかとなつたとき、私たちの人生に光りが差し、快く歩いて行けるようになるのではないかでしょうか。私一人で人生を歩むのではなく、阿弥陀様の救いたいと言う願いを喜ばせていただき、いつもそばで導いてくださっていることに気付かせていただくことこそ、本当の人生を歩ませていただきということではないでしょうか。

一人で生きているのではなく、阿弥陀様の願いの中で、生かされていく人生を慶び、お念佛申させていただきます。

合掌

JISSEN No.9

TAKE FREE

**Copyright 2019 RYUKOKU Univ.  
Graduate school of Shin Buddhist  
Studies all rights reserved.**